

高知県十和村

十川駄場崎遺跡発掘調査報告書

TŌ KAWADA BA SAKI

— 第4次発掘調査概要報告 —

1991年3月

高知県教育委員会

序

四万十川は日本最後の清流と言われていますが、高知県の中でも豊かな自然と歴史が残されています。流域には数多くの遺跡が発見されており、縄文時代から現代までの四万十川とともに生きた人々の暮らしをみることができます。今回、調査が行われた十川駄場崎遺跡もその中のひとつです。

十川駄場崎遺跡は、縄文時代の遺跡として知られていましたが、四万十川流域の縄文時代遺跡の中では最も古い遺跡であり、これまでにも数回の発掘調査が行われています。特に昭和63年度に実施された調査では、縄文時代草創期の豆粒文土器や長大な尖頭器が出土し、国の史跡である不動ヶ岩屋遺跡とともに県内では縄文時代最古の遺跡であることが判明しました。この結果を受けて、本年度は縄文時代草創期の遺物の広がりの確認、さらには旧石器時代の遺物の有無を探るための調査を行いました。

調査の結果、旧石器時代の遺物の発見はありませんでしたが、縄文時代草創期の包含層の最下部を確認し、尖頭器や石鎌をはじめとし、1万点にもおよぶ遺物の出土があり、当時の石器製作技術の一端を知ることができました。

本書は、調査結果の概要をまとめたものであり、残された資料は今後の調査研究をまたなければなりませんが、この報告書が埋蔵文化財への理解を深め、考古学研究の一助になれば幸いです。

また、今回の発掘調査にあたっては、地権者及び地元十川地区の方々には多大な御協力をいただき、さらに十和村教育委員会にも御援助をいただき、無事終了することができました。ここに深甚の謝意と敬意を表するものであります。

平成2年3月31日

高知県教育委員会

教育長 西森 久米太郎

例　　言

- 1 本書は、国庫補助を受け、高知県教育委員会が実施した「十川駄場崎遺跡」の発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は高知県教育委員会が主体となり、平成2年8月6日から9月14日の間に行い、調査面積は128m²であった。
- 3 十川駄場崎遺跡の発掘調査は、村史編纂及び開発工事等により過去3回実施されており、今回は第4次調査である。
- 4 発掘調査及び本書の執筆、編集には、森田尚宏（高知県教育委員会文化振興課主幹）があつた。
- 5 調査にあたっては、岡本健児高松短期大学教授（高知県文化財保護審議会会長）に調査顧問をお願いした。また、岡本東三、栗島義明両氏には御助言をいただいた。記して感謝の意を表します。
- 6 本書で使用した方位は磁北であり、高度は海拔高である。
- 7 実測図は、尖頭器及び石鎚が実大、他は $\frac{1}{2}$ であり、図中の番号は写真図版の番号と同一である。また、出土遺物についてはTD4の略号を付している。
- 8 出土遺物等の調査資料は、高知県教育委員会において保管している。

本文目次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査概要	5
IV 調査結果	13

挿図目次

- 第1図 遺跡周辺地形図
- 第2図 周辺遺跡位置図
- 第3図 四万十川流域縄文遺跡位置図
- 第4図 調査区設定図
- 第5図 調査区土層図
- 第6図 F～H区遺物出土分布図
- 第7図 A～E区 タ
- 第8図 集石 1～3
- 第9図 石礫 1
- 第10図 タ 2
- 第11図 タ 3
- 第12図 尖頭器
- 第13図 石核・剥片
- 第14図 剥片・スクレーバー・叩石

表 目 次

第1表 出土石器計測表

写真図版目次

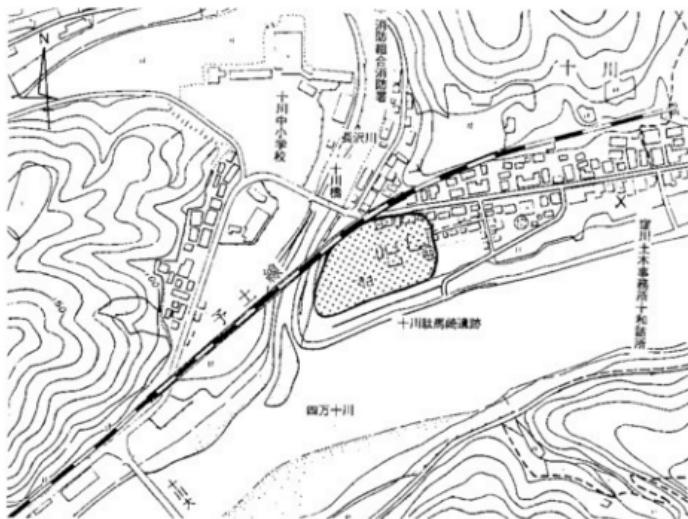
- | | |
|--------------------|-------------|
| 図版 1 遺跡遠景（北西より） | 遺跡遠景（南より） |
| 図版 2 完掘状態 | V層遺物出土状態 |
| 図版 3 A・B区IV層遺物出土状態 | A区集石 1 |
| 図版 4 A区深掘りセクション | A区VI層遺物出土状態 |
| 図版 5 A・B区石礫・土器出土状態 | |
| 図版 6 C区集石 2 検出状態 | C区集石 2 |
| 図版 7 D・E区V層遺物出土状態 | E区東壁セクション |
| 図版 8 E区深掘り | E区深掘りセクション |
| 図版 9 D・E区石礫・叩石出土状態 | |
| 図版10 F・G・H区縹面 | H区サブトレ |
| 図版11 H区石礫・尖頭器出土状態 | H区サブトレセクション |
| 図版12 石 級 1 | |
| 図版13 タ 2 | |
| 図版14 タ 3 | |
| 図版15 尖頭器 | |
| 図版16 石 核 | |
| 図版17 剥 片 | |
| 図版18 スクレーバー・叩石 | |

I 調査に至る経過

十川駄場崎遺跡は四万十川中流域、十和村に所在する縄文遺跡として広く知られている。過去に発掘調査が行われた遺跡として、下流の広瀬遺跡とともに遺跡の範囲、時期等はかなり判明している。発掘調査は昭和57年に村史編纂事業の一環として実施された。この第1次調査では、舌状台地に立地す遺跡の先端部に近い位置を 3×6 mのトレンチにより発掘が行われている。調査の結果、縄文時代早期、前期、後期の遺物包含層と前期の集石炉1基が検出されており、石礫、石核、剝片、土器が出土している。

第2次調査としては、国道381号線改良工事に伴う新道建設のために遺跡の北斜面部を調査対象地として、発掘が行われている。調査は、昭和61年度に試掘調査を行ない、昭和62年度には本調査が実施され、多量の石鏃と石核、剥片を出土し、石器製造址であると考えられた。また、同時に長沢川を隔てた対岸の川口ホリキ遺跡（駄場崎B地区遺跡）の調査も行われ、縄文時代早期、前期、後期の土器と石器が検出されている。

第3次調査は、昭和63年度に個人宅地造成に伴い実施され、縄文時代早期の包含層の下層より、尖頭器2点と豆粒文土器を出土し、草創期に逆上る遺跡であることが判明した。この結果を受けて、今回の調査は草創期の遺物包含層の層序的確認及び旧石器時代の遺物、遺構の有無を確認するために、国庫補助を受けて実施することとなった。



第1図 遺跡周辺地形図 (S=1/5,000)

II 遺跡の位置と環境

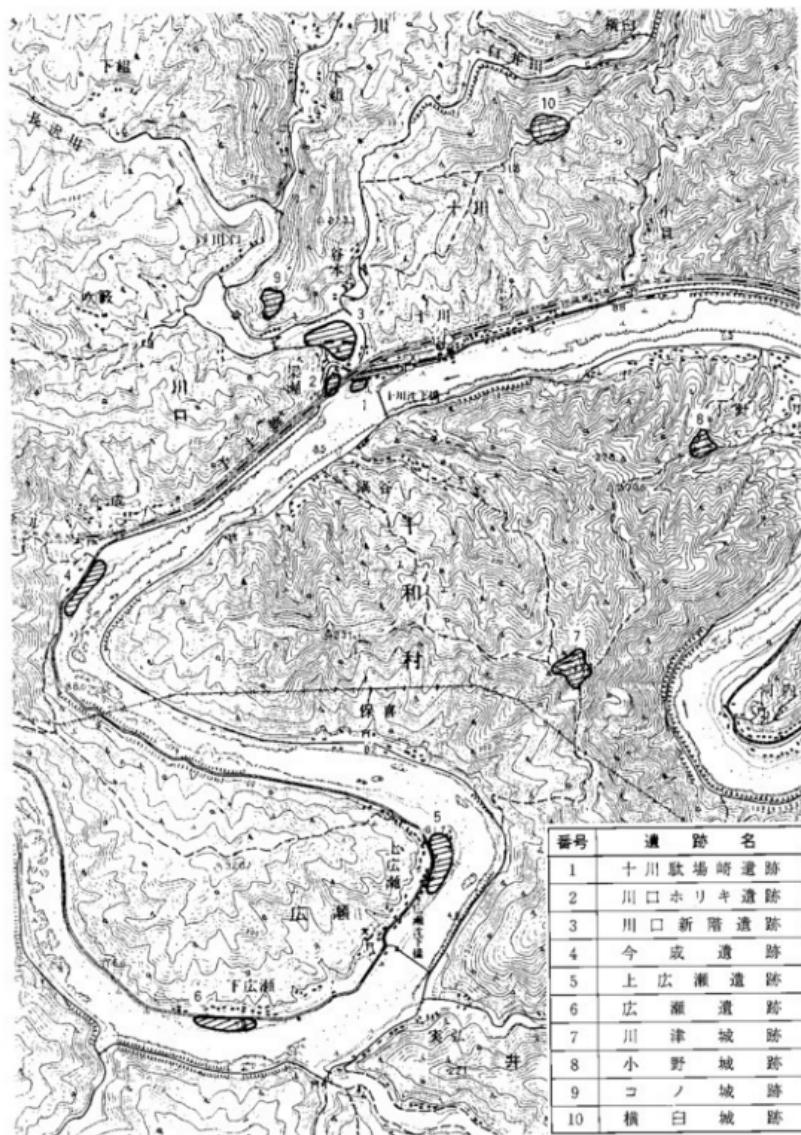
十川駄場崎遺跡は、日本最後の清流といわれる四万十川の中流域、幡多郡十和村十川に所在している。四万十川は数多くの支流を集めながら四国山地南西部を蛇行しながら西流し、十和村の西に位置する西土佐村江川崎で南へと流れを変えて太平洋へと注いでいる。四万十川流域の地質は西南日本外帯に属し、三波川変成帯、秩父累帯、四万十帯に分けられている。源流は秩父累帯に発し、四万十帯を流下しているが、流域に存在する頁岩、粘板岩、珪岩、砂岩、流紋岩等が四万十川の転石としてみられ、流域の各遺跡では石器の素材として活用されている。

遺跡の立地は、四万十川北岸の支流長沢川との合流地点である舌状台地上である。この舌状台地は、十和村の西の中心である十川の集落が位置する河段段丘から延びており、その規模は幅120m、長さ200mである。遺跡の中心は舌状台地先端部の平坦面であり、東に建設されている保育園手前までを遺跡の範囲とすれば、南北50m、東西80mを測り、面積は4,000m²を占めることとなる。標高は82m前後を測り、平常時の四万十川の水面からの比高差は10m前後である。また、増水時における水位の上昇は著しく、過去の増水時には水没しており、調査中にも台風による増水で遺跡と河水面の比高は2~3mであった。しかし、水流は長沢川との合流点であるところからきわめて穏やかであり、土砂は流出することなく多量に堆積したものと考えられる。

四万十川流域には多数の縄文時代の遺跡が発見されており、その所在は上流域から下流域まで広がっている。発掘調査が行われた遺跡は数少ないが、十和村内では広瀬遺跡、下流域の中村市では三里遺跡、中村貝塚等が知られている。時期的には、採集された石器、土器からみて早期~前期、後期の遺跡が多く、中期と後期は少ない。最も古くは、やはり十川駄場崎遺跡であり、昭和63年度の調査で確認されたように草創期に位置付けされる。県内における草創期の遺跡としては、佐川町の不動ヶ岩屋洞穴遺跡が著名であり、有舌尖頭器とともに細隆線文土器が出土している。また、愛媛県には草創期の代表的な遺跡である上黒岩岩陰遺跡や穴持洞穴遺跡等が所在しており、西南四国の石灰岩地帯に洞穴遺跡の分布がみられる。従前、段丘上では草創期に属する遺跡は確認されておらず洞穴遺跡のみであったが、十川駄場崎遺跡における草創期の存在により、他の段丘上の遺跡においても草創期に逆上る可能性を考えなければならない。

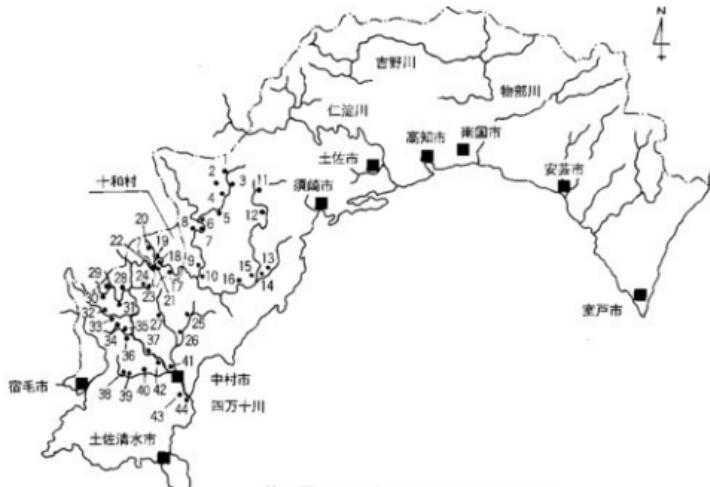
十川駄場崎遺跡の対岸には後期を中心とする川口ホリキ遺跡が所在し、北には現在十川中学校である川口新階遺跡が立地しており、長沢川の合流点付近は草創期から後期にかけての撫点的集落が立地する条件を備えていたのであろう。また、下流には、後期の広瀬上層式等の標識的遺跡である広瀬遺跡や上広瀬遺跡、今成遺跡等の縄文遺跡が段丘上に点在している。

縄文時代以降の遺跡としては中世城跡を見ることができる。十和村内では10ヶ所の中世城跡が確認されており、十川駄場崎遺跡周辺にはコノ城跡が立地している。弥生時代から古代の遺跡は現在のところ確認されていないが、今後の発見に期待される。



第2図 周辺遺跡位置図 ($S=1/25,000$)

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	北川遺跡	後期	23	棟屋敷遺跡	早期～前期
2	高野遺跡	前期	24	堂ヶ市遺跡	早期？
3	土居越遺跡	早期～前期？	25	大用遺跡	中期～後期
4	下折渡遺跡	早期	26	奈路駁場遺跡	早期～後期
5	影野地遺跡	前期	27	シオリダバ遺跡	後期
6	中平遺跡	々	28	沖遺跡	早期～前期
7	庄司ヶ市遺跡	後期	29	上巣遺跡	前期～後期？
8	影地遺跡	早期	30	大宮遺跡	前期
9	江師遺跡	早期？後期	31	小津賀遺跡	々
10	森駁場遺跡	早期	32	曾我の西遺跡	後期
11	船戸遺跡	早期～前期	33	広井駁場遺跡	早期～前期
12	岩土遺跡	々	34	ひろぞう遺跡	後期
13	仁井田遺跡	前期？	35	蹄塘山遺跡	々
14	根元原遺跡	中期？	36	鳥打場の下遺跡	々
15	仕出原遺跡	後期	37	三里遺跡	々
16	川口遺跡	々	38	ツグロ橋下	晚期
17	奈路遺跡	早期	39	久保畠遺跡	々
18	小野遺跡	後期	40	国見遺跡	中期～後期
19	十川駁場崎遺跡他	草創期～後期	41	中村貝塚遺跡	晚期
20	吉城遺跡	早期	42	入田遺跡	々
21	上広瀬遺跡	後期	43	間崎遺跡	中期
22	広瀬遺跡	々	44	初崎遺跡	後期



第3図 四万十川流域縄文遺跡位置図

III 調査概要

1. 調査方法

調査区の設定にあたっては、昭和63年度の第3次調査対象地に隣接した場所を対象とすることとし、現況が畠地であることから埋戻し等も考慮し、区画の広い畠地を調査区とした。結果的にはほぼ遺跡の中心である平坦面であり、昭和57年の第1次調査区の東に隣接する位置となった。

調査区は、現地形にそくしてN-67°-Eの基準ラインを設定し、3mグリッドによることとした。最も重要と考えられる第3次調査区の南に並行して東西に5グリッド（3×15m）を配置し、さらに舌状台地に直交するように3グリッド（3×9m）を配し、全体としてはT字形のトレンドを設定することとなった。グリッドの名称は、東西を東からA～E区とし、南北を北よりF～H区を呼称した。

発掘は、層序を確認しつつ遺物分布の位置を記録しながら人力により掘り下げたが、堆積土が非常に堅く、かつ発掘深度は深掘りで地表下約3mに及んだために一部重機を使用しなければならなかった。最終面としては、A区とE区の両端一部を最下層確認のために深掘りを行い、B～D区は地表下約1.6mの面で終了した。F～H区は、時間的な制約もあり地表下約50cmの面で終了し、H区の南端では深さ約1.2mのサブトレンドにより下層の層序を確認した。

なお、調査面積は72m²であり、調査期間は8月6日から9月14日である。

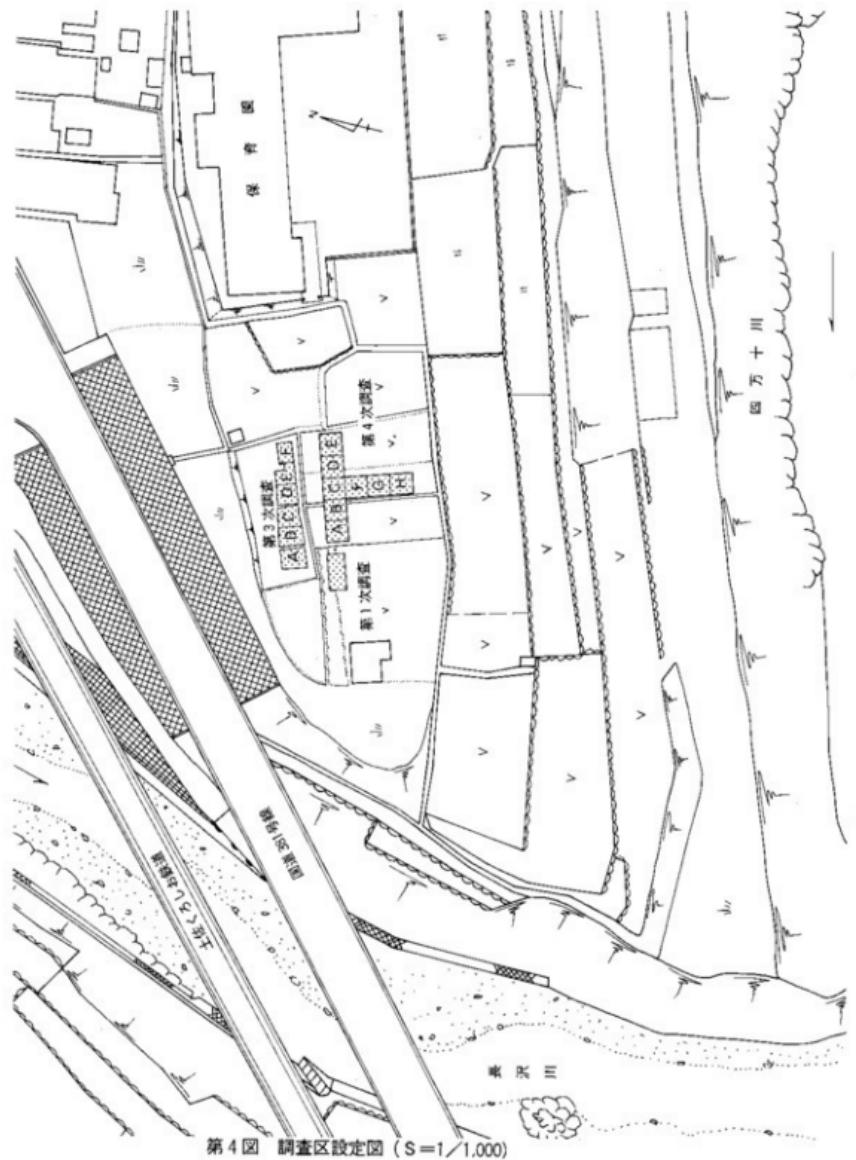
2. 層序

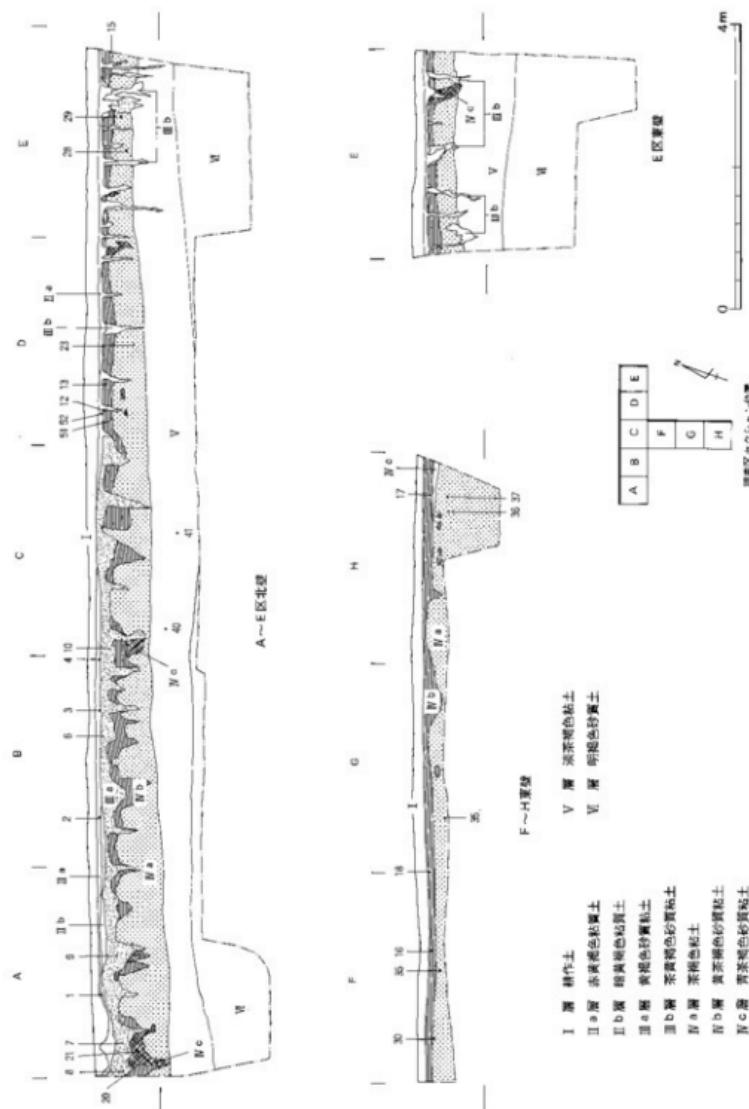
今回の調査区における基本層序は次のとおりである。

I 層	耕作土	II a 层	赤黄褐色粘質土	II b 層	暗黄褐色粘質土
III a 層	黄褐色砂質粘土	III b 層	茶黃褐色砂質粘土		
IV a 層	茶褐色粘土	IV b 層	黄茶褐色砂質粘土	IV c 層	青茶褐色砂質粘土
V 層	淡茶褐色粘土	VI 層	明褐色砂質土		

A～E区の基本的層序は同一であるが、東部に比して台地の先端部方向となる西部ではII b層・III a層が新たに出現しており、IV a層も東部30cmから西部では70～80cmと堆積が厚くなっている。また、VI層面を東端では地表下1.2mであるが、西部では地表下1.6mと地形の傾斜を表している。IV a層中には上層のIII a・b層からの貫入がみられ、層序が分断されており、この貫入の周辺にはIV b・c層が漸移層として存在する。これらの層序はIII・IV層堆積時におけるクラックによるものと考えられる。F～G区では、台地の中央部であり、II・III層は存在せず、I層下はIV a・b層となる。

第1・3次調査の層序との対比ではやや色調の違いはあるが、各層序はほぼ対応している。遺物はI層からVI層上面まで出土するが、いずれも土器を含んでいる。中でもIII・IV層中では多量の石核、剝片が散布しており、第1次調査の結果から早期から後期の包含層とみられ、V層最下部からVI層上面の遺物が草創期に該当するものと考えられる。





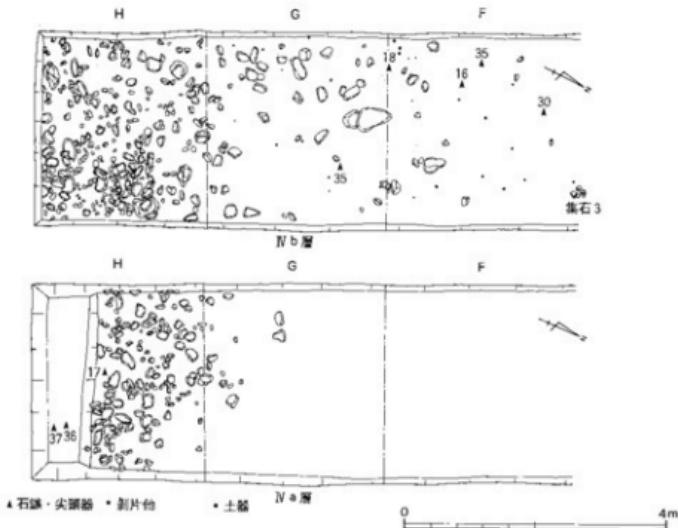
第5図 調査区土層図 (S=1/80)

3. 調査経過

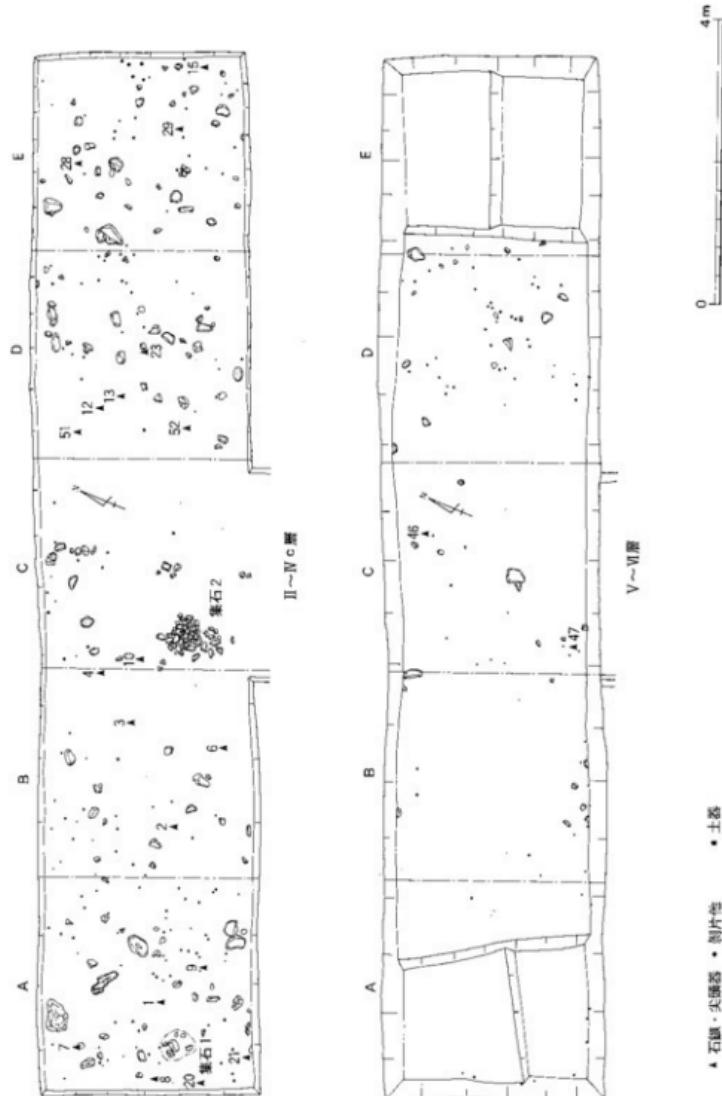
遺物の出土はⅠ層中からみられ、石鏃及び剝片が出土している。Ⅱ層中からも石鏃6点とともに剝片、土器片が出土しているが少量である。Ⅲ・Ⅳ層からは多量の遺物が出土しているが、その大半は石核とこれに伴う剝片であり、他に叩石等に使用されたとみられる自然石も多数混在している。石鏃は、Ⅲ層から13点、Ⅳ層から20点、合計33点と過半数以上が出土しており遺物包含層の主体を占めている。また、土器の出土も認められたが、少量であり、いずれも小片であった。分布状況は、第6・7図のとおりであり、各調査区から平均的に出土しており、集中は認められなかった。遺物間には30~40cmの自然石が配石として存在するが、その配置はランダムであり、遺構としてとらえることはできない。しかし、剝片等の遺物散布は配石の周辺にやや多い傾向はみられるが、集中出土するものは認められない。

V層では、上面で遺物の分布が一度切れるが中面に包含層が存在しており、石鏃2点を含み剝片、土器片等が出土している。さらにV層最下層からVI層上面にかけて再び剝片が出土するが少量であり、小土器片を伴っている。土器片は、VI層上面出土を含めいずれも小片であり、かつ堆積土が非常に硬く緻密であるために遺存状況はきわめて劣悪であった。

遺構としては3基の集石が検出されているが、Ⅱ層またⅢa、b層の上面であり、やはり前期に属するものと考えられる。集石を中心とする遺物の集中的散布ではなく、むしろ集石周辺の遺物は少ない傾向がみられる。



第6図 F~H区遺物出土分布図



第7図 A～E区遺物出土分布図

4. 遺構

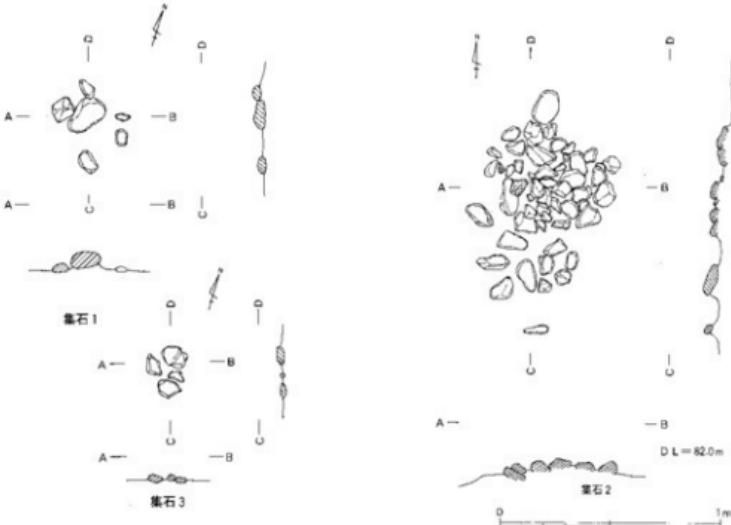
遺構としては、3基の集石以外にⅡ層で3個の柱穴が検出されている。柱穴はA区の北東部にまとまっており、直径20~30cmを測る円形である。深さは15~30cmであるが出土遺物はなく、埋土はⅠ層耕作土と同じであるところから、近世以降の柱穴と考えられる。

集石3基はともにⅡ層~Ⅲa層上面において検出されており、第1~3次調査で検出されている集石と同じく縄文時代前期の所産とみられる。

集石1はA区で検出されており、Ⅲa層上面に位置している。集石は6個の礫により構成されており、小規模なものである。掘り込み等は伴わず平坦面に置かれたものであり、長径20cm前後の礫を中心に10cm前後の礫が周囲にみられる。4個の礫は熱により赤化しているがタル等の付着はみられない。

集石2はC区の南西部に検出されており、54個の礫から構成されている。3基の集石の中では最も規模が大きく、第1・3次調査で検出された集石と同様のものである。使用される礫の大半は砂岩の河原石であるが、中には流紋岩の剝片が含まれている。赤化した礫はやや少なく半数以下である。一部重なる礫もあるが、ほぼ平坦面をなしている。

集石3はF区の北東部、耕作土下のⅣb層において検出されているが高さは他の集石と同じである。10cm前後の砂岩5個によるきわめて小規模な集石であり、いずれも熱による赤化がみられる。



第8図 集 石 1~3

5. 遺物

出土した遺物の大半は多量の剥片であり、石鎚等の石器、土器片は少量であった。土器片は遺存状態が非常に悪く、包含層がよくしまっているため原形で取り上げることのできたものはほとんどなかった。土器片の出土層位はⅡ～Ⅵ層上面に及んでいるが、細片が多く時期決定することは難しい。胎土は茶褐色を呈し砂粒をやや含むが、雲母片等はみられなかった。器厚は0.4～0.5cmと全般的に厚い。B区Ⅳa層出土の土器片では断面に纖維痕がみられたが、外面は無文である。また、C区V層出土の土器片には内外に条痕を施すものが存在するが、胎土等は他の土器片と同様で分離することはできなかった。

石鎚は表採も含め48点が出土しており、尖頭器は8点が出土している。他の石器としてはスクレーパー、叩石、二次加工剥片、剝片、石核が出土しているが打製石斧はみられなかった。

石鎚の出土グリッド、層位は次のとおりである。

A区 Ⅱ層 1点 (1)	Ⅲ層 3点 (7～9)	Ⅳ層 2点 (20・21) 計 6点
B区 Ⅱ層 5点 (2～6)	Ⅳ層 1点 (22)	計 6点
C区 Ⅲ層 1点 (10)	Ⅴ層 2点 (40・41)	計 3点
D区 Ⅲ層 4点 (11～14)	Ⅳ層 3点 (23～25)	計 7点
E区 Ⅲ層 1点 (15)	Ⅳ層 4点 (26～29)	計 5点
F区 Ⅲ層 2点 (16・18)	Ⅳ層 4点 (30～33)	計 6点
G区 Ⅲ層 1点 (19)	Ⅳ層 2点 (34・35)	計 3点
H区 Ⅳ層 5点 (17・36～39)	計 5点

この他にI層から2点(42・43)、表採5点(44～48)の石鎚が出土している。

出土した石鎚の形態は種々であるが、基部を基に以下のような型式に分類される。

A - 有茎凸基型 29

B - 無茎平基型 38・46

C₁-無茎凹基型 (直線的な浅い抉り) 5・8・9・10・22・25・28・33・40・41・43・47・48

C₂- タ (V字形の深い抉り) 1・2・3・4・6・20・23・26・27・42・44・45

C₃- タ (U字形の深い抉り、鍼形鎚) 14・17・18・21・31・32

C₄- タ (先端部は丸味を帯び脚部にくびれを有する) 34・35

D₁-無茎円基型 11・12・15・39

D₂-無茎尖基型 24

以上のように一般的にみられる形態をとるものが大半であるが、C₄はトロトロ石器または異形局部磨製石器と呼ばれるものであり注目される。また、36は形態、調整からみれば明らかに石鎚の範に入るものだが、その大きさは全長6cmを測り、重量も11.5gと非常に重く、石鎚としての機能は考え難い。使用される石材は、流紋岩22点、チャート13点、サヌカイト4点、黒曜石2点、硬砂岩2点であり、在地の石材である流紋岩とチャートが圧倒的に多くみられる。

また、黒曜石の中1点は乳白色を呈す姫島産であるが、他の1点は透明感のある黒曜石であり、姫島以外の原産地から搬入された可能性がある。

尖頭器は8点出土しており、その出土グリッドと層位は次のとおりである。

A区IV層1点(55)	B区II層1点(53)	C区IV層1点(49)	D区II層1点(52)	D区III層1点(51)	E区III層1点(56)	H区IV層1点(50)
-------------	-------------	-------------	-------------	--------------	--------------	-------------

49・50はほぼ平基の基部をもち非対称五角形を呈す両面加工の尖頭器である。54～56は基部であり、55・56は厚さの薄い柳形状の尖頭器になると思われる。52・53は平基でやや小形である。51は有茎であり、縁辺部のみに調整を加えている。51～53は小形であり石鎚の大きさに近いものである。49・50・54は調整が荒く、断面も厚く類似している。使用される石材はチャート1点、硬砂岩1点であり、他はすべて流紋岩である。

石核、剥片は流紋岩が圧倒的に多く、チャートは石鎚の比率からみればその占る割合は非常に少ない。石核は礫皮面を残すものが多く、任意の剥離面を打面とし、他方向から剥離を数回行った後に放棄されている。(57～59) 剥片には連続的に剥離されたとみられる縱長剥片が量的には少ないが存在している。(62～64) 他の剥片はやや横長の不定形を呈するものが大半を占め、大形剥片が多くみられる。(60・61)

スクレーパーは現在のところ少量であり、側辺または端部に刃部を作出したものであるが、素材となる剥片に規格性はなく、不定形の剥片を素材とするものが多い。(65)

叩石は、円形の砂岩礫を使用しており、側辺部に敲打痕がみられる。重量は500g前後であり、半割されたものも出土している。出土状況は配石とともに散在しており、石器製作、剥片剥離等を想定される剥片や細片との集中的出土はみられなかった。

以上出土遺物を概観したが、時期決定の指標となる土器の遺存状態が悪く、取り上げることができなかつた細片もあり、また取り上げても崩壊するものが多く、特にVI層上面で出土した土器についても細片であり、草創期の土器としての確証を得ることはできなかつた。

石器類では、やはり石鎚が最も多く出土しており、第1～3次調査の結果と合せみると早期を中心とした石鎚と考えられる。さらに、今回の調査でも多量の石核と剥片を出土しており、石器製造にかかる拠点的な集落跡の存在と考えなければならない。

IV 調査結果

十川駄場崎遺跡は四十川流域の縄文時代遺跡の中では古くから知られており、発掘調査が行われた数少ない遺跡であった。発掘調査は過去3回にわたって行われており、特に昭和63年に実施された第3次調査では、縄文時代草創期に逆上の豆粒文土器及び大形の柳葉形尖頭器が出土しており、遺跡の重要性が確認された。

今回の発掘調査は、第4次調査として縄文時代草創期包含層の層序的確認と縄文時代以前、旧石器の遺物包含層確認を目的として行われた。以下に調査結果をもとに遺物整理は今なお不十分ではあるが簡単にまとめてみたい。

調査区は遺跡の立地する舌状台地のほぼ中央部に3mグリッドでT字形に設定された。この位置は、第1調査の東であり、第3次調査区の南となり、台地を縱、横断する形となった。基本的な層序は、第1次、第3次調査と同様であり、I層耕作土下にはII層として赤ホヤ火山灰をベースとする赤褐色粘質土がみられたが、標高の高くなる東と南では切れている。以下、III・IV層が最も遺物を含む早~前期の包含層であるが、西部へと厚く堆積しており、自然地形を表わしている。

第3次調査で大形の尖頭器及び豆粒文土器を出土した第5・6層は、今回の調査におけるV層にあたるが、2層に細分することはできなかった。また、第3次調査担当者の現地における実見によれば、第5・6層はV層に比べやや赤味をおびた粘性のやや強い土層であったとのことであり、北側の谷地形へと土質の変化が認められる。VI層は上面において剝片と土器の細片を出土しており、草創期包含層と考えられるが、土器は細片のため時期的な決定を行うことができず、剝片自体も上層出土のものと同様な形態であるところから、積極的に草創期の裏付けとなる資料とは言い難い。しかしながら、当遺跡の遺物包含層はこのVI層上面（地表下約2.5m）が最下面であり、以下は砂質土の無遺物層であるところから、旧石器時代の包含層は現在のところ存在せず、第3次調査の結果からみてもV・VI層上面が草創期の遺物包含層として考えられる。また、F~H区では、耕作土下にG・H区で礫面が検出されたが、礫は数cmから50~60cmの大形のものまでみられ、南へと密度が高くなっていることから、自然堆積によるものと考えられる。

検出された遺構としては、3基の集石と配石をみることができる。集石は、C区の集石2の規模が大きく、これまでの調査で検出された集石炉に類似するが、赤化した焼石はあまり多く含まれておらず、タール状の炭化物の付着も少ないとみれば、集石炉としての使用以外の機能も考えなければならない。A区及びF区の集石1・3は数個の礫からなる小規模なものである。礫はほとんどが熱により赤化しており、焼石であるところから小規模ではあるが集石炉として使用されたものと考えられる。検出面はほぼ同一であり、やはり前期に属するものであろう。配石はIII~V層各面を通じて検出されており、遺物の分布等からみても石器製作等に

に関する遺構としては考えられない。

出土遺物は土器と石鎚を中心とする石器であった。土器については遺存状態の悪さと出土量が少ないため明確な判断をしかねるが、IVa層に繊維を含む土器、V層では条痕文土器が存在する。いずれも厚手の土器であり、出土層位からみれば草創期から早期にかけての土器と考えられる。

石鎚は48点が出土しており、その形態は8種類であるが、早期の石鎚とされる鍔形鎚やトロトロ石器が存在する。また、通常にみられる小形鎚の他にきわめて大形の石鎚が出土しており注目される。形態、製作技術は石鎚そのものであるが、その大きさは石鎚としての機能を阻害するものであり、投槍等の他の用途が考えられる。

尖頭器は8点出土しているが、荒い調整の小形の尖頭器と石鎚に近い形態をとる小形のものであり、第3次調査出土の大形の尖頭器に類するものはみつけられなかった。尖頭器の出土層位はII～IV層におよんでおり、石鎚と共に伴っている。草創期以降も当遺跡では尖頭器が製作が続けて行われており、弓矢とともに投槍も狩猟具として使用されていたものと考えられる。

石核、剝片については整理作業が不十分であり、今後の整理の結果をまたなければならないが、現在のところ規格的な剝片剝離はあまりみられず、石核も自然面を残した粗雑なものが多い。使用される石材は流紋岩が最も多く80%近くを占め、他はチャートである。いずれも四万十川、長沢川で転石として採集されたものであり、他地域からの搬入された石材としては黒曜石とサヌカイトを見ることができる。

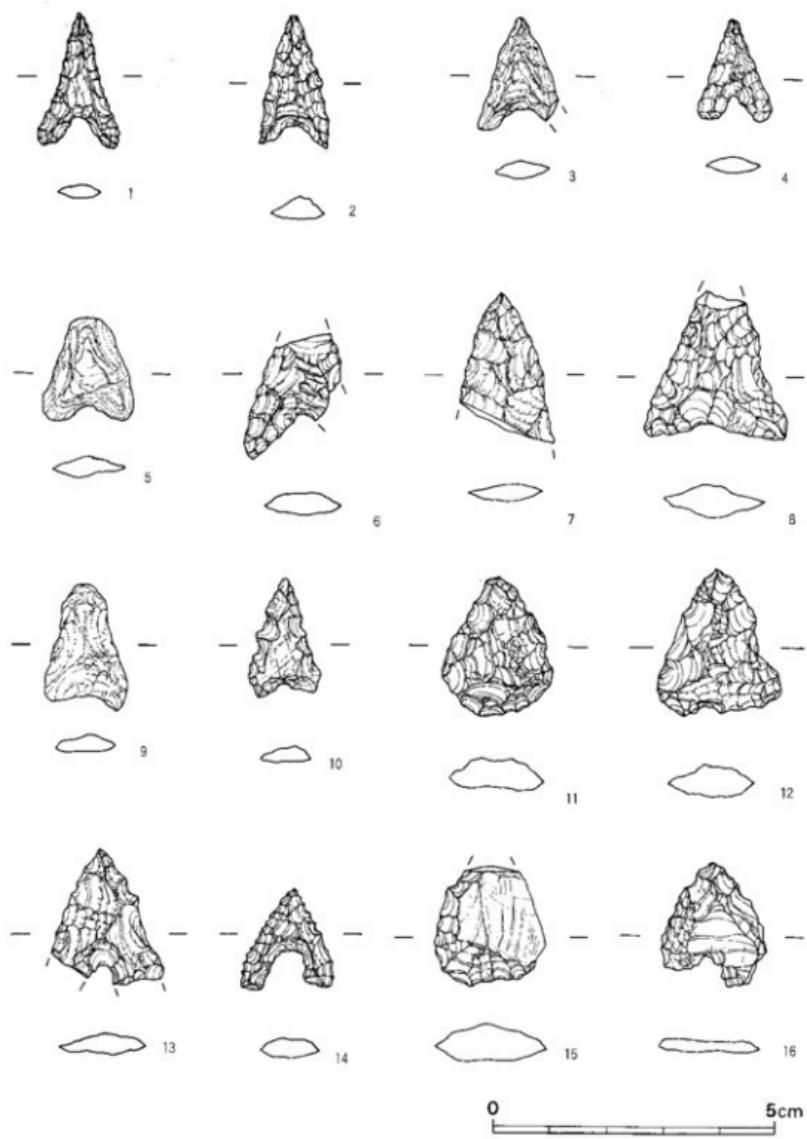
以上の結果を今回の調査では得たが、資料が少なく消極的ではあるが、草創期の遺物包含層の下限を確認することができたことは調査成果としてよいであろう。しかし、調査面積が少なく、特に下層部における遺物の分布状態を十分に把握できなかった点は今後の課題であり、再度の調査が望まれるところである。

第1表 出土石器計測表1

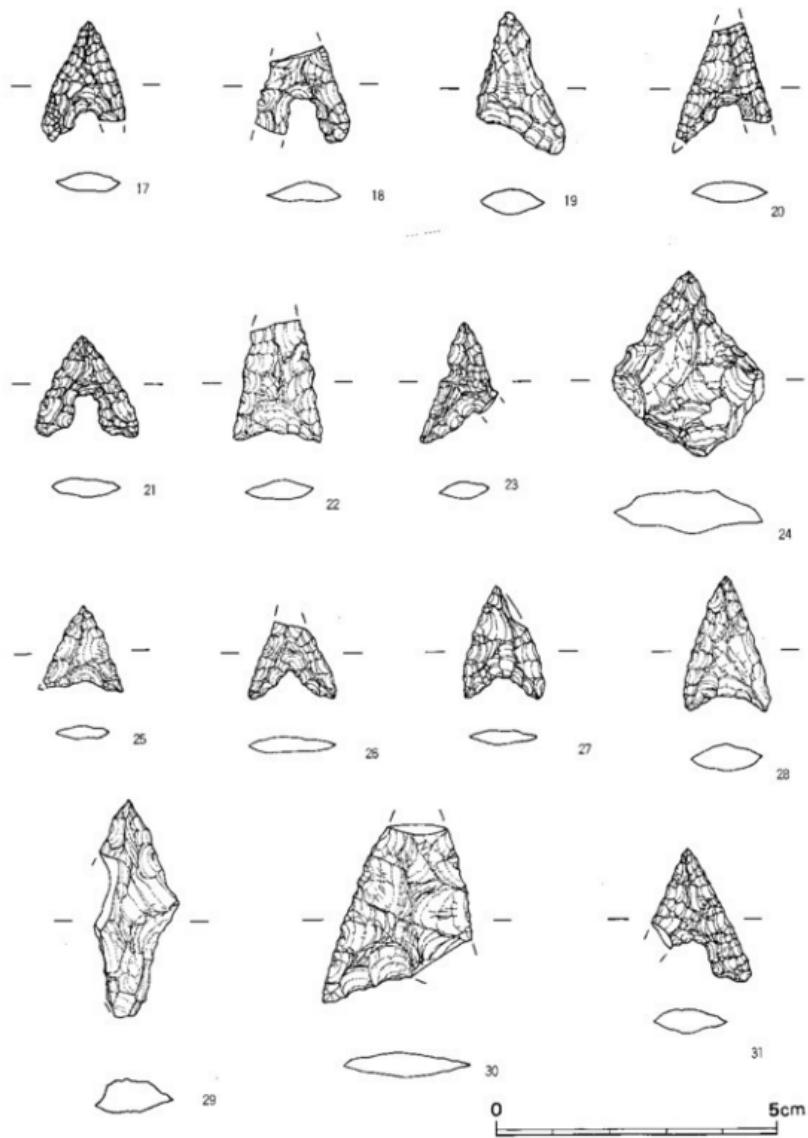
番号	器種	グリッド	出土層位	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材
1	石鏃	A	II 層	2.5	1.5	0.2	0.4	チャート
2	タ	B	タ	2.3	1.2	0.4	0.8	タ
3	タ	タ	タ	2.0	1.4	0.3	0.5	サヌカイト
4	タ	タ	タ	1.7	1.4	0.3	0.3	流紋岩
5	タ	タ	タ	1.8	1.65	0.35	0.8	サヌカイト
6	タ	タ	タ	2.2	1.7	0.4	0.8	流紋岩
7	タ	A	III 層	2.65	1.7	0.3	1.2	タ
8	タ	タ	タ	2.6	2.6	0.6	2.6	タ
9	タ	タ	タ	2.2	1.4	0.3	0.7	サヌカイト
10	タ	C	タ	2.1	1.3	0.3	0.5	流紋岩
11	タ	D	タ	2.4	2.0	0.5	2.55	チャート
12	タ	タ	タ	2.6	2.3	0.6	2.2	タ
13	タ	タ	タ	2.4	1.9	0.4	1.15	流紋岩
14	タ	タ	タ	1.8	1.6	0.3	0.7	チャート
15	タ	E	タ	2.1	2.0	0.65	2.65	流紋岩
16	タ	F	タ	2.2	1.9	0.2	0.85	チャート
17	タ	H	IV 層	2.1	1.5	0.3	0.65	タ
18	タ	F	III 層	1.7	1.7	0.4	0.5	流紋岩
19	タ	G	タ	2.5	1.6	0.4	0.8	タ
20	タ	A	IV 層	2.1	1.3	0.3	0.8	チャート
21	タ	タ	タ	1.7	1.8	0.3	0.6	タ
22	タ	B	タ	2.1	1.6	0.3	0.9	硬砂岩
23	タ	D	タ	2.1	1.4	0.3	0.4	流紋岩
24	タ	タ	タ	3.2	2.75	0.75	3.85	タ
25	タ	タ	タ	1.55	1.4	0.2	0.25	タ
26	タ	E	タ	2.35	1.6	0.2	0.3	タ
27	タ	タ	タ	1.95	1.4	0.2	0.45	チャート
28	タ	タ	タ	2.4	1.5	0.5	0.95	流紋岩

第1表 出土石器計測表2

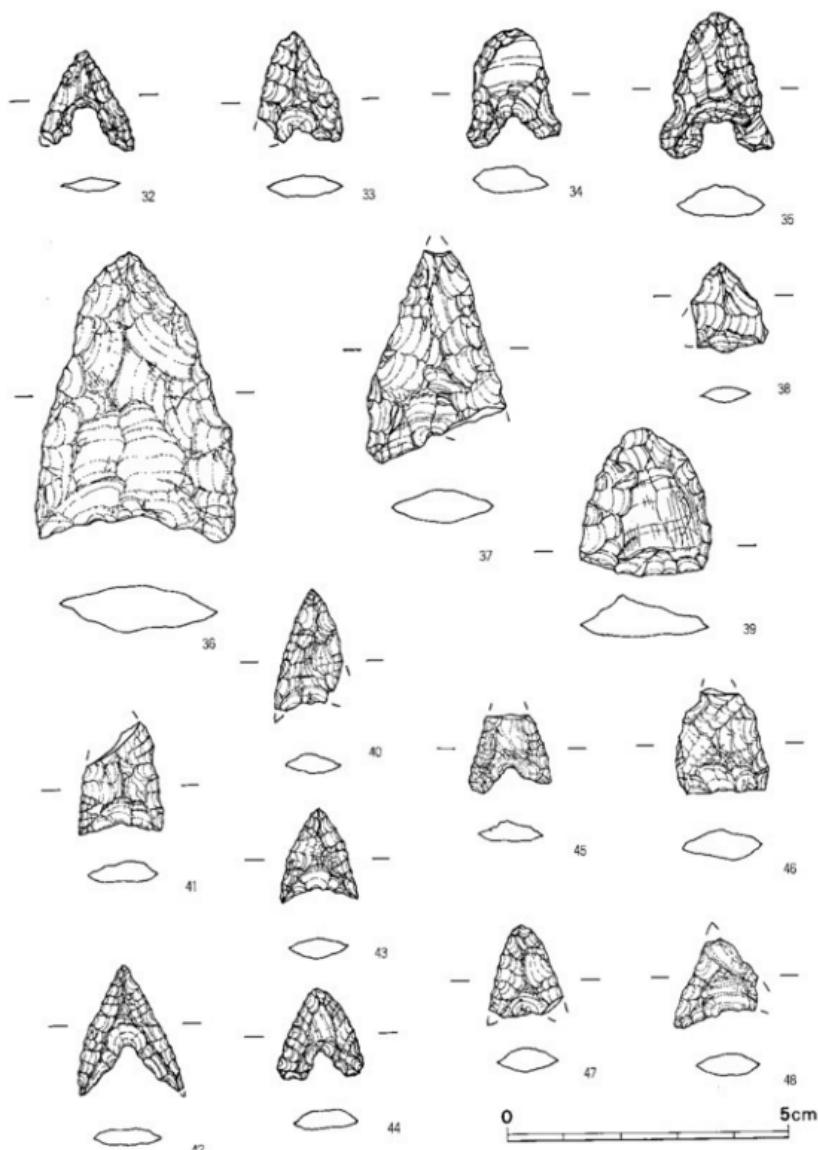
番号	器種	グリッド	出土層位	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材
29	石鏃	E	IV 層	3.9	1.5	0.6	2.65	サヌカイト
30	タ	F	タ	3.2	2.7	0.4	3.05	流紋岩
31	タ	タ	タ	2.3	1.7	0.4	0.8	チャート
32	タ	タ	タ	2.3	1.7	0.2	0.45	流紋岩
33	タ	タ	タ	1.9	1.5	0.4	0.6	黒曜石
34	タ	G	タ	2.1	1.7	0.45	1.2	チャート
35	タ	タ	タ	2.6	2.1	0.6	2.5	タ
36	タ	H	タ	5.1	3.5	0.8	11.5	硬砂岩
37	タ	タ	タ	3.7	2.5	0.6	4.8	流紋岩
38	タ	タ	タ	1.5	1.35	0.25	0.6	タ
39	タ	タ	タ	2.6	2.4	0.7	4.2	タ
40	タ	C	V 層	2.1	1.2	0.35	0.65	タ
41	タ	タ	タ	1.9	1.5	0.3	0.9	タ
42	タ	A~E	I 層	2.25	1.9	0.25	0.55	タ
43	タ	タ	タ	1.6	1.4	0.35	0.45	タ
44	タ	表採	-	1.6	1.5	0.3	0.5	黒曜石
45	タ	タ	-	1.4	1.5	0.3	0.5	流紋岩
46	タ	タ	-	1.8	1.7	0.5	1.5	チャート
47	タ	タ	-	1.6	1.25	0.4	0.6	流紋岩
48	タ	タ	-	1.55	1.5	0.4	0.7	タ
49	尖頭器	C	IV 層	5.2	3.6	1.4	24.55	タ
50	タ	H	タ	5.0	3.9	1.6	26.3	タ
51	タ	D	III 層	5.4	2.1	1.0	7.3	タ
52	タ	タ	II 層	3.6	2.9	0.8	7.0	タ
53	タ	B	タ	3.9	2.25	0.7	5.1	硬砂岩
54	タ	タ	タ	5.2	3.4	1.6	25.8	流紋岩
55	タ	A	IV 層	2.9	3.7	0.8	6.55	タ
56	タ	E	III 層	2.2	2.6	0.85	3.7	チャート



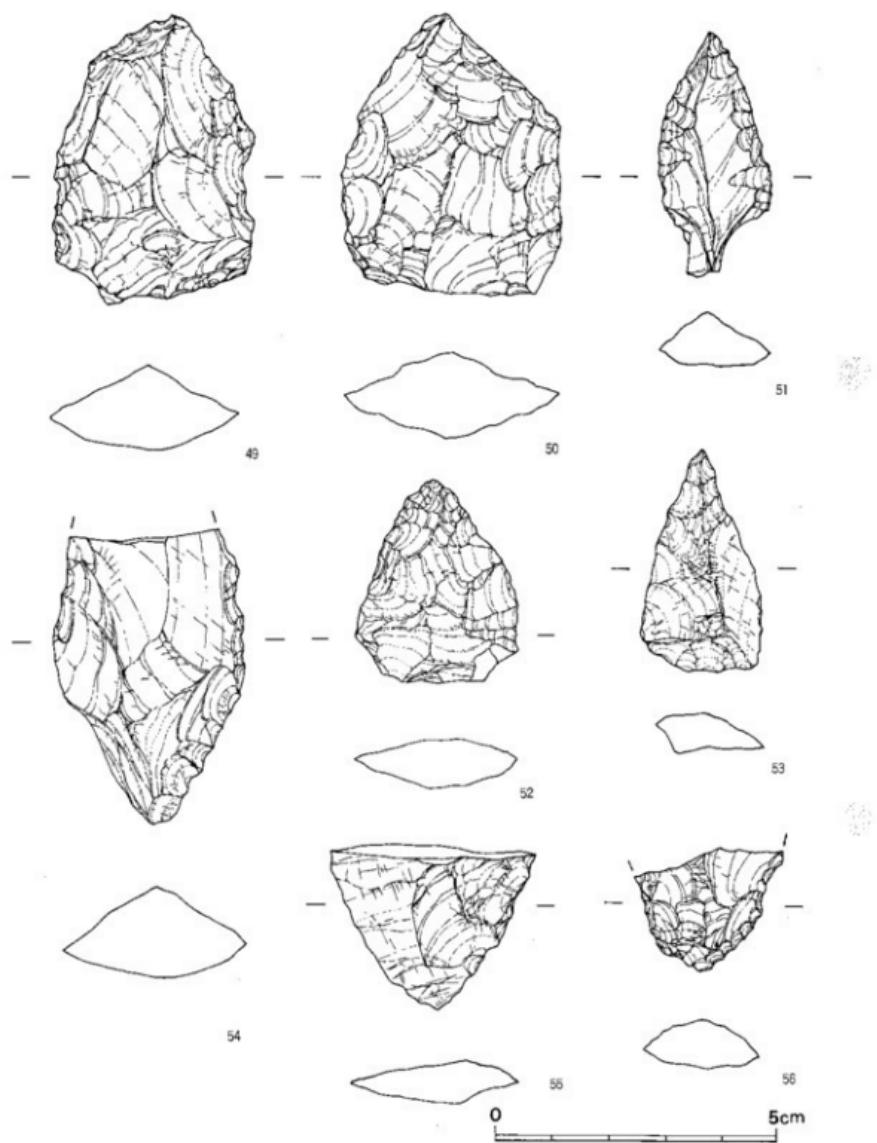
第9図 石鏃1



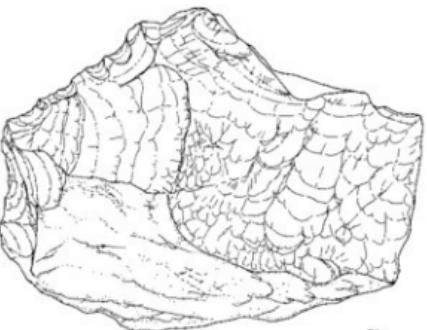
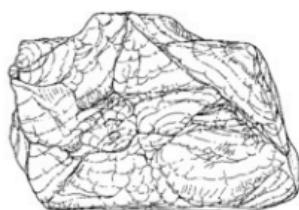
第10図 石鏃 2



第11図 石鎌 3



第12図 尖頭器

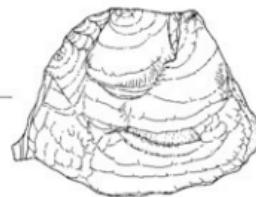


57

58



59

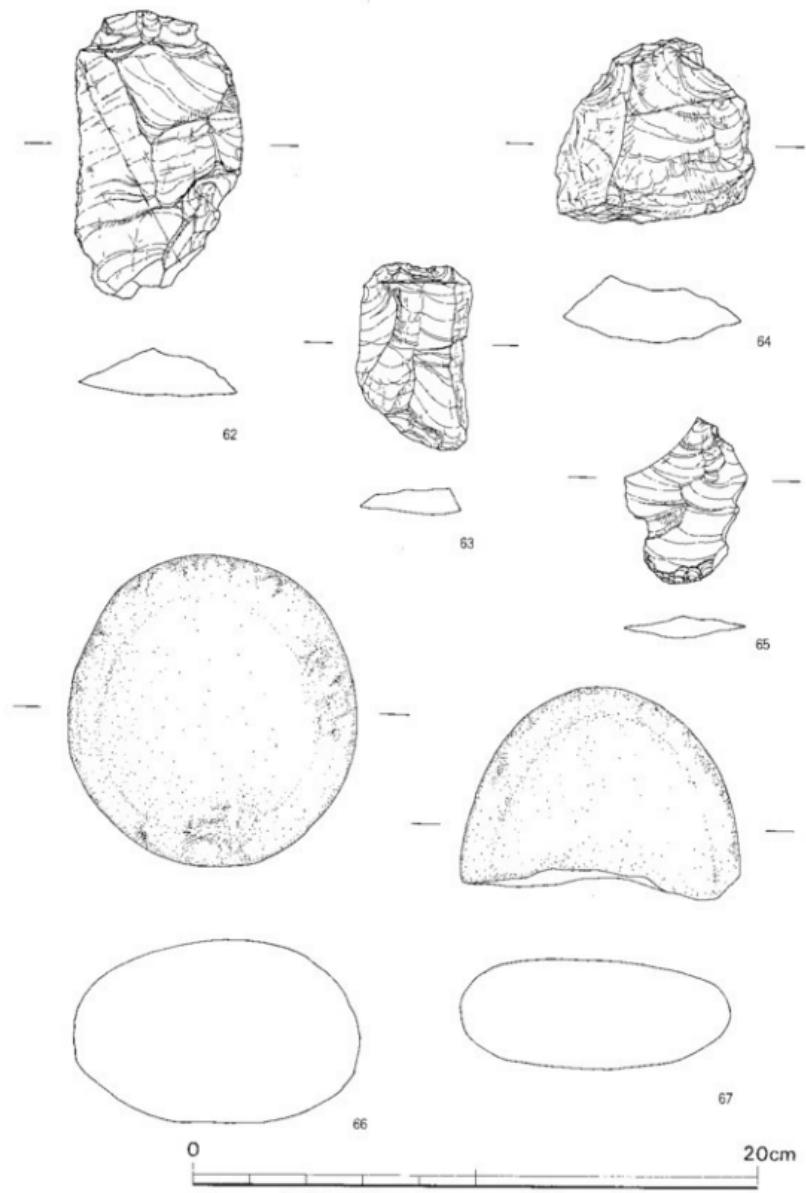


61

0

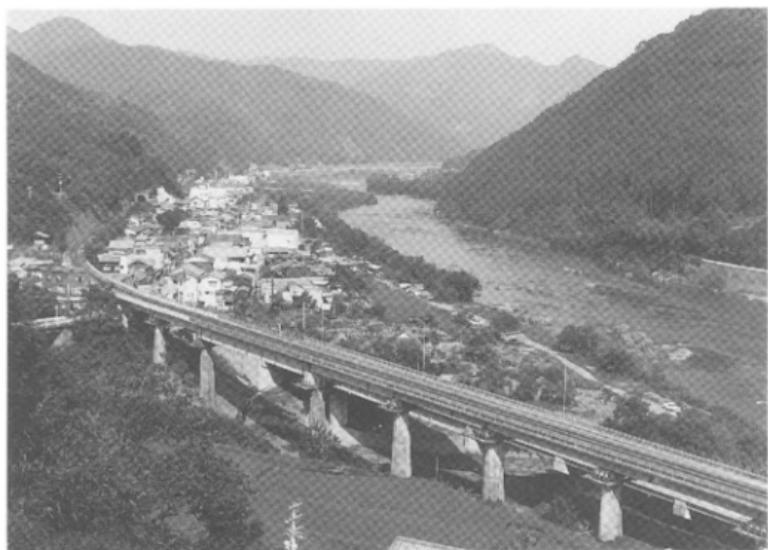
20cm

第13図 石核・削片

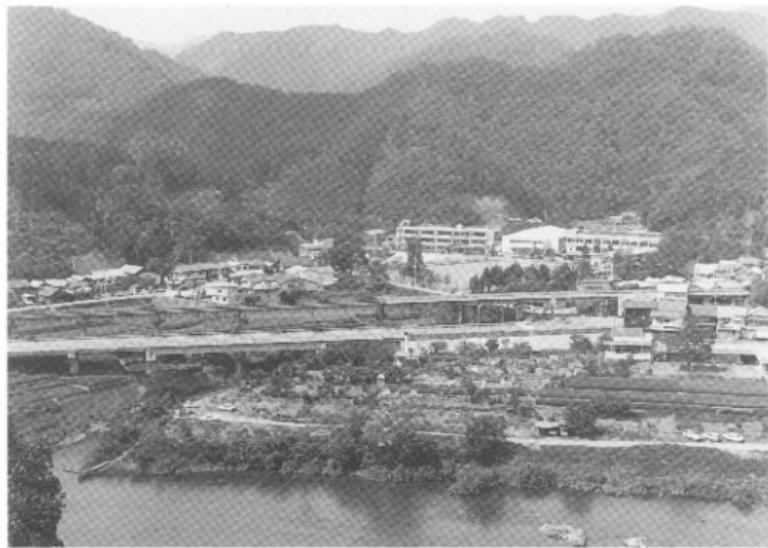


第14図 剥片・スクレーバー・叩石

写 真 図 版



遺跡遠景（北西より）



遺跡遠景（南より）

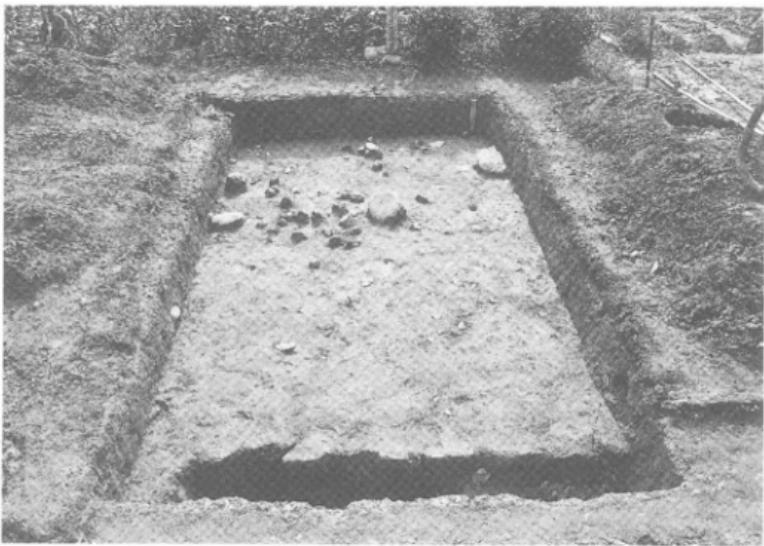
図版 2



完掘状態



V層遺物出土状態



A・B区 IV層遺物出土状態

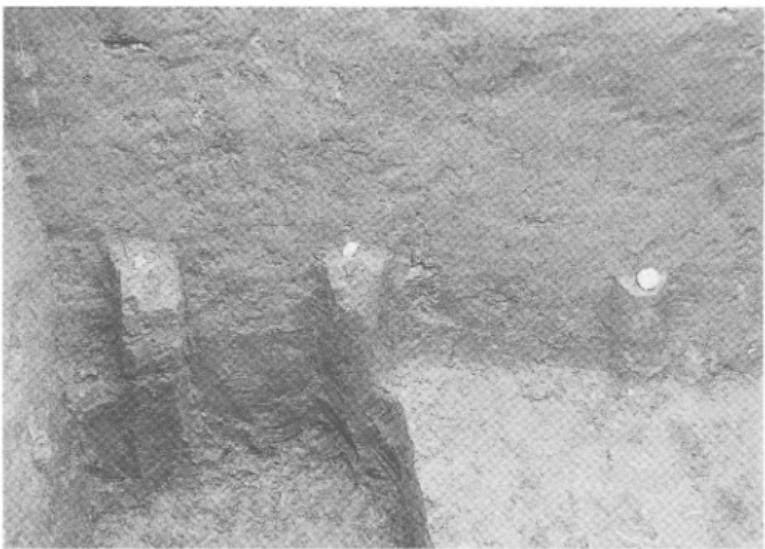


A区 集石 1

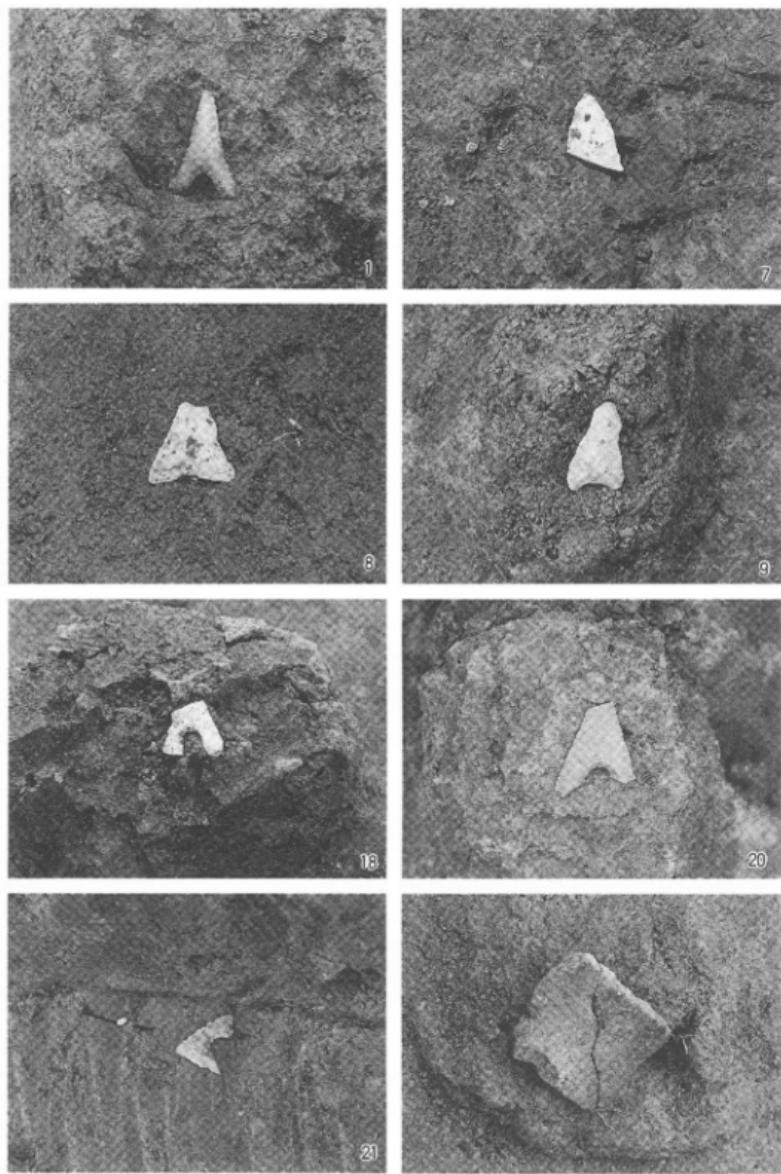
図版 4



A区 深掘りセクション



A区 VI層遺物出土状態



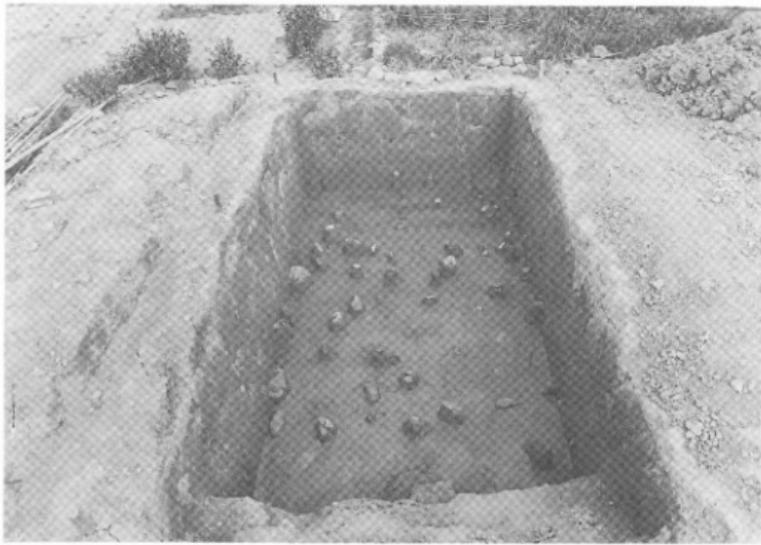
A・B 区 石鏃・土器出土状態



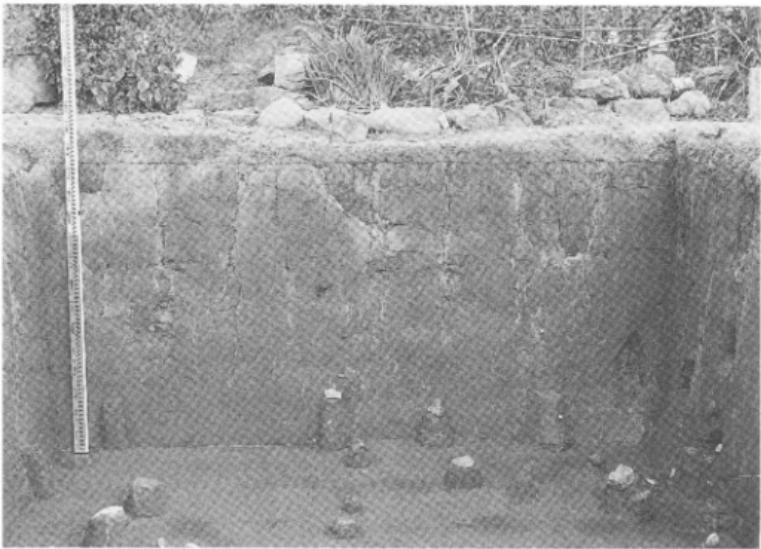
C区 集石 2 條出狀態



C区 集石 2

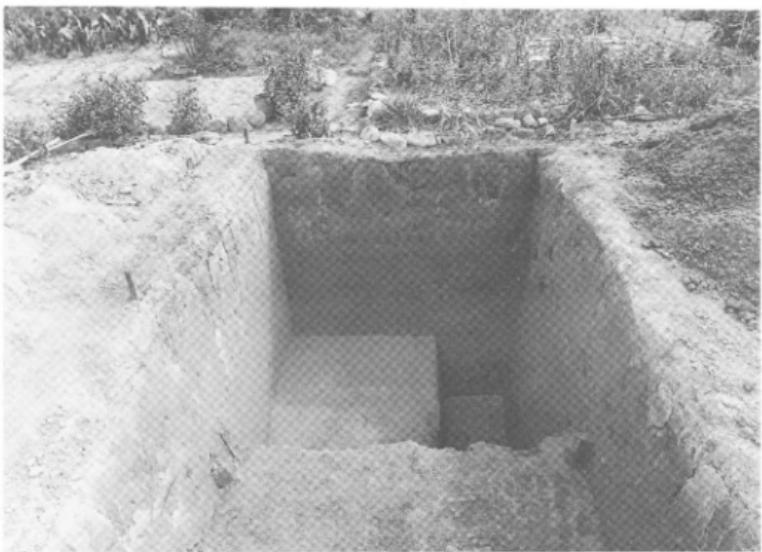


D・E 区 V層遺物出土状態

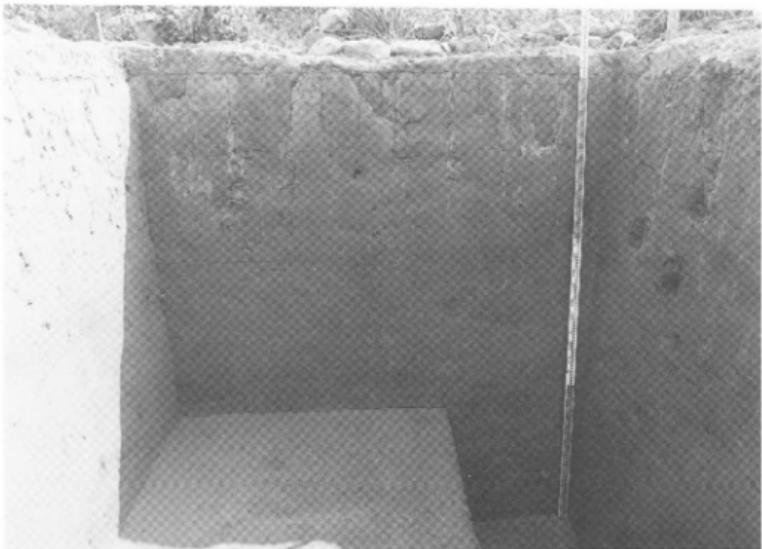


E区 東壁セクション

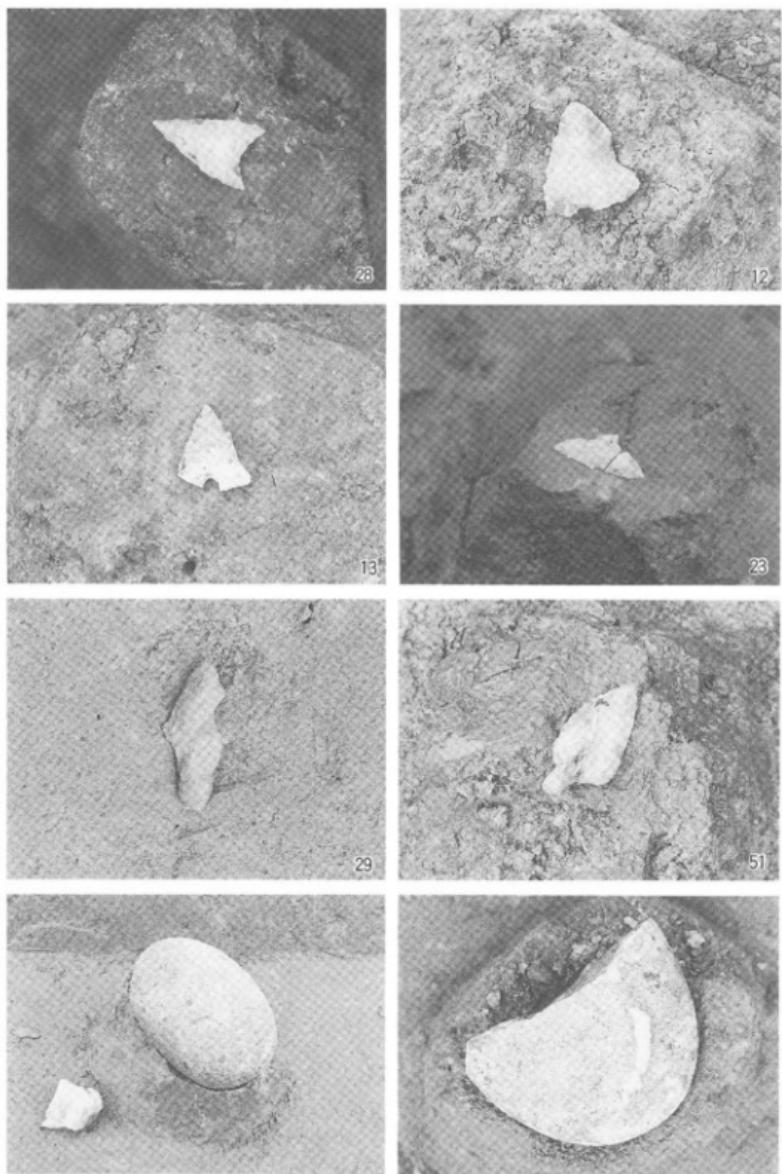
図版 8



E 区 深掘り



E 区 深掘りセクション



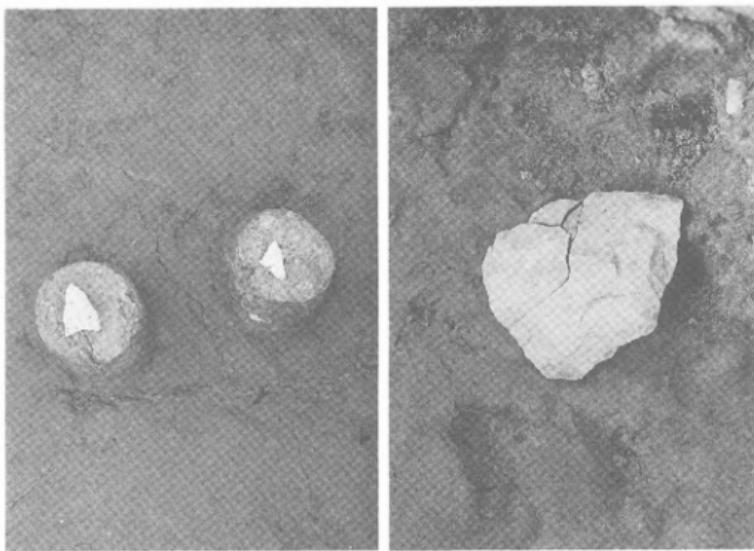
D・E 区 石鏃・叩石出土状態



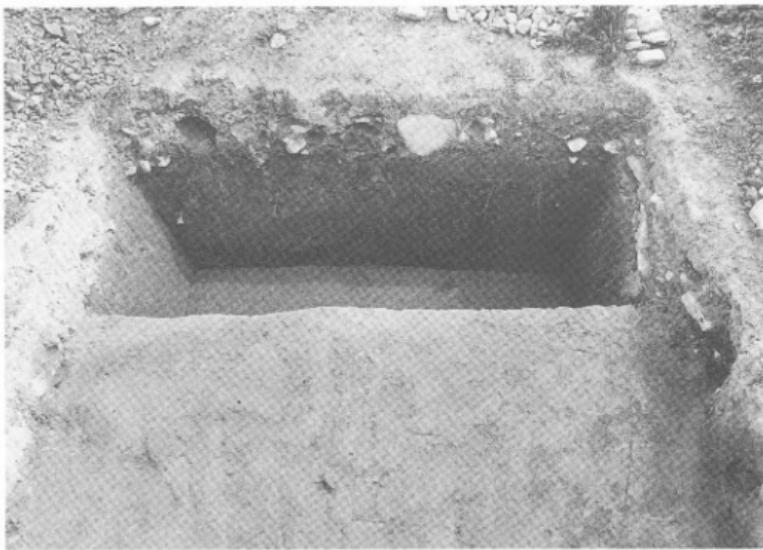
F・G・H区 碓面



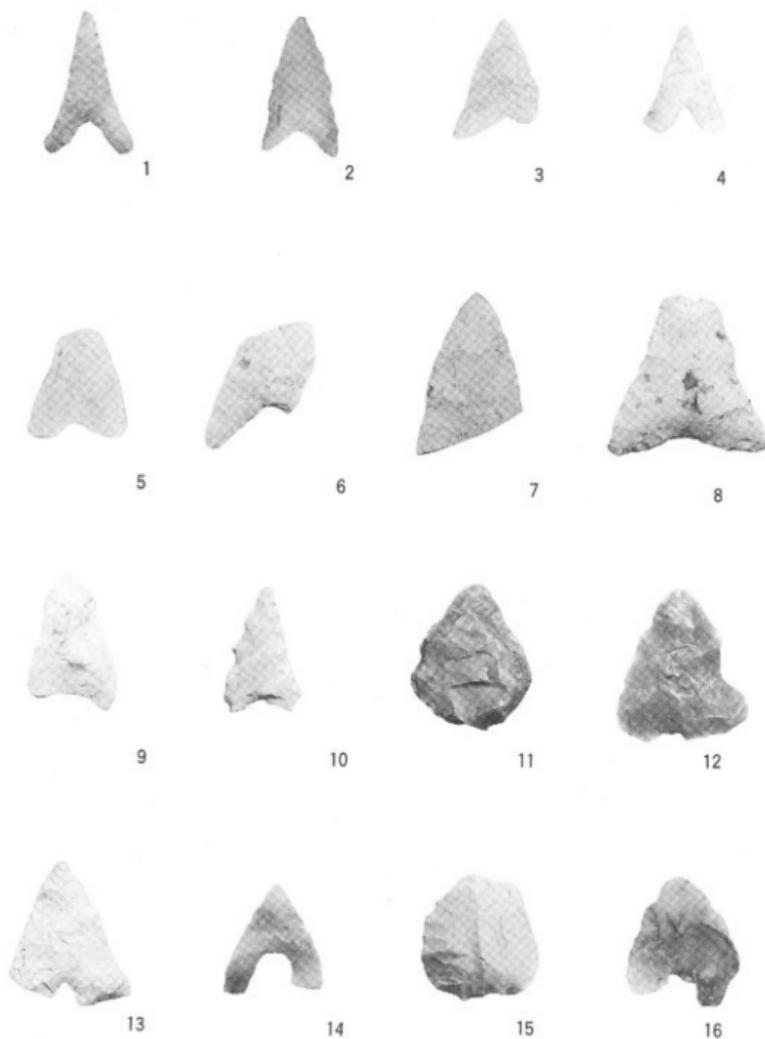
H区 サブトレ



H区 石錐・尖頭器出土状態



H区 サブトレセクション



石鏃 1



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



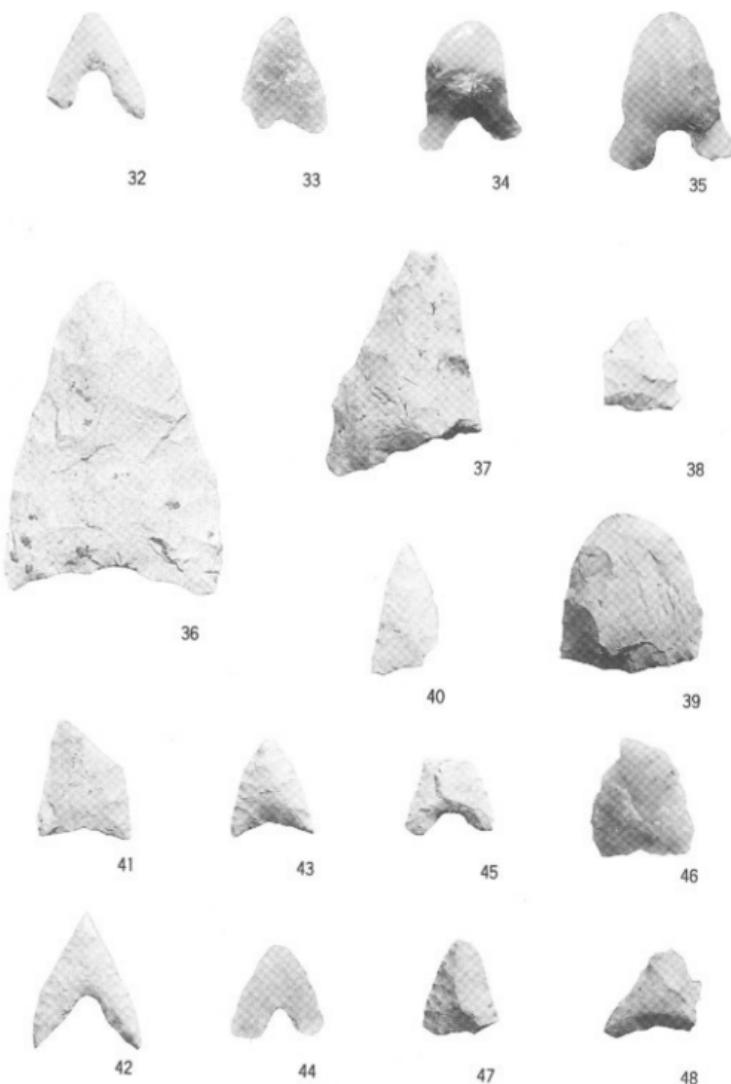
29



30



31



石鏃 3



49



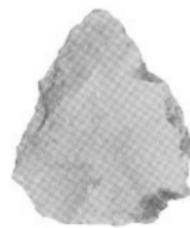
50



51



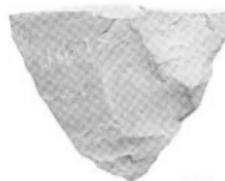
54



52



53



55



56

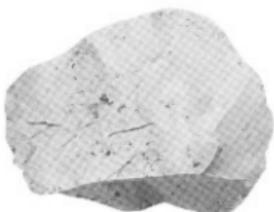
尖頭器



58



57

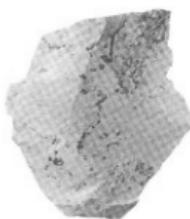


59

石 核



61



60



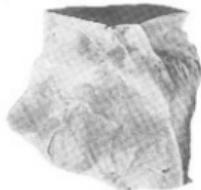
62



64



63



剥片



65



66

67

スクレーバー・叩石

高知県埋蔵文化財調査報告書第34集

高知県土和村

十川駄場崎遺跡発掘調査報告書

- 第4次発掘調査概要報告 -

1991年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会
高知市丸ノ内1-7-52
印 刷 高知県軽印刷株式会社